# 人物画にこめられた思い
## ―描く人と描かれる人

**2023年12月23日(土)－2024年3月24日(日)　会場：常設展示室**

※月曜休館 ただし、1月8日(月・祝)、2月12日(月・休)は開館、12月28日(木)～2024年1月1日(月・祝)、1月9日(火)、2月13日(火)は休館。
※開館時間 9:30～17:00
※学芸員によるギャラリートーク 1月20日(土)、2月11日(日・祝)　ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会)：1月3日(水)　いずれも14:00より

No. 27　菊池契月《楚蓮香》20世紀

人物画は、古今東西において絵画の主要なテーマとして表現され続けてきました。日本を含むアジアでは、神仏を人の形で表し、崇拝の対象とした宗教画をはじめ、寒山拾得(かんざんじっとく)や林和靖(りんなせい)といった中国の故事人物画が好まれ、多く描かれました。一方で日本の古典文学、例えば平家物語や桃太郎話といった物語絵に加え、菅原道真や豊臣秀吉、宮本武蔵ら歴史上の人物も画題として好まれ、多く制作されてきています。

近現代においては人物画においても写実を極めた描写や、内面を描き出そうとしたもの、極端に単純化し抽象表現に近い作品など、バリエーションが広がります。画題について知らなくても、作者あるいはモデルの心情に思いを寄せながら見ることで世界が広がり、その作品の魅力を次々と発見できる場合もあります。しかし伝統的な画題の約束事を知っていると、楽しみが広がることもあるでしょう。

ここでは本展出品作品の一部について、作品鑑賞のヒントとしてお役立ていただけるような、画題や作家の画風の特徴等について、ご紹介します。

### 1. 中国の故事人物画

中国では故事人物、例えば寒山拾得や虎渓三笑(こけいさんしょう)といった仙人や高士、祖師等にまつわる絵画が多く描かれました。また中国からの強い影響を受け続けた日本でも、これらの画題は人気が高く、現代まで受け継がれてきています。第1章では、歴史画を得意とした郷土ゆかりの日本画家・藤井松山、福田恵一らが描いた中国の故事人物画に続き、美人の誉れ高い楚蓮香を描いた菊池契月や、中国詩人や仏教にまつわる故事を記した富岡鉄斎作品も展示します。その画題の一部を簡単に紹介します。

#### 楚蓮香

中国玄宗皇帝の時代に、長安一と謳われた美人の名。楚蓮香が外に出るとその香りに蝶が誘われ、付き従いながら飛び遊んだと言われる。菊池契月《楚蓮香》(No.27)は、太湖石にもたれる姿でその美しさを流麗な線で細やかに描き出しており、白い肌や衣と青の対比が鮮やかである。楳嶺四天王の一人・菊池芳文の養子となり、人物画・歴史画を得意として独自の画境を拓いた契月の、丹精込めた逸品といえる。

#### 寒山拾得

中国唐の時代に、世俗を離れ天台山国清寺にひっそりと暮らした2人の隠者。ボロ服を着て、寒山は経巻、拾得は箒を持つ姿で描かれる。寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身とも言われる。本章の福田恵一《寒山拾得》(No.20)は、右幅に寒山、左幅に拾得を描いた双幅の作品。寒山は後手に白い紙を持った立姿で描かれているが、この紙は経巻に見立てたものであろう。また拾得は箒でなく竹製の器のようなものを右手に下げている。中国の隠者らしい衣装と髪型の2人の上には、水墨による付立描法で、斜めにしなる樹木が描かれている。対幅での対比の効果が十分に表れている作品と言えよう。

#### 林和靖

中国北宋時代の詩人・林逋（967-1028）のことで、西湖に浮かぶ孤山に庵を結び、一生独身で過ごした。鶴と梅を愛し、風流三昧の日々を送った。禅宗の世界で特に好まれ、梅花といえば林和靖と連想されるほどであった。また梅花は、寒風吹き雪の残る早春からいち早く清楚で清香を放つ花を咲かせることより、花中の君子とされる。本章出品作・藤井松山《梅鶴高士図》(No.25)は、「林和靖」の名をタイトルに付けてはいないものの、本図を見た人々は「暗黙の了解」でその名を思い浮かべるであろう。

### 富岡鉄斎（1836-1924）

富岡鉄斎は「日本最後の文人」と言われた儒学者で、独自の画境を貫いた画人であった。「自分の絵を見る時は、まず賛文を読んでくれ」と言うのが口癖であったことは有名で、彼の画は、博学な知識に基づいた中国古典を題材にしたものが多い。本章展示作品《児童歓喜之図》(No.22)は、多くの仏塔を建立した古代インドのアショカ王と釈迦の出会いをめぐる伝説が主題である[1]。《扇因尽障償之図幅》(No.23)は、宋代の文豪で政治家でもあった蘇軾が、寒さで扇が売れない製扇屋のために草書や枯木竹石を描き瞬く間に売れて、稲作も豊かになったという故事を表している[2]。強烈な個性を示す彼の画は、馴染むまでは親しみにくい感があるかもしれないが、背景についての情報があれば、親近感がわいてくると思われる。

No. 20　福田恵一《寒山拾得》1940年代

## 2. 人の姿で表現された神仏

中国では道教や仏教に関する人物画を「道釈人物画」と呼び、神仙や仏教の羅漢、観音、祖師などが描かれ、信仰の対象あるいは鑑賞用とされました。日本には主として中世に、水墨道釈画が禅宗の余技として請来され、流行します。第2章で展示される作品のうち、おもな画題について説明します。

### 群仙図

仙人はもともと人間であったが、長年の道教の修行を経て、自らの住所を仙境に変え、仙術を操って人間を救う。白髭の老人だけではなく、若者の容貌をした仙人や女性の仙人もいる。仙薬や修行により、神通力や不老不死を実現する。「李鉄拐（りてっかい）」、「呂洞賓（りょどうひん）」らは「八仙」に含まれ代表的な仙人であるが、「蝦蟇（がま）仙人」なども有名。「李鉄拐」は瓢箪、「呂洞賓」は剣を持つというような約束事を踏まえて、図案化されている。

### 十六羅漢図

仏教の修行をおさめて真の悟りに至り、人々から供養尊敬を受けるにふさわしい人のことを阿羅漢、略して羅漢という。煩悩を全て断ち、最高の境地に達した高僧である羅漢は、中国唐代から描かれるようになり、日本では鎌倉時代以降、禅宗とともに盛んとなった。十六羅漢図、十八羅漢図（十六羅漢に2人追加）、五百羅漢図などしばしば描かれた。

### 七福神

七福神は一般的には恵比須、大黒天、福禄寿、毘沙門天、布袋、寿老人、弁財天。それぞれヒンドゥー教、仏教、道教、神道など様々な背景を持っている。毘沙門信仰から始まり、毘沙門天に恵比須、大黒が加わって三神として信仰されることが続くが、後に弁天信仰も盛んになって恵比須、大黒、弁財天というケースもできた。その後仏教の布袋、道教の福禄寿、寿老人などが入って七福神となったというのが一般的だが、諸説ある。

### 「菅原道真公図」と「渡唐天神図」

菅原道真（845-903）は平安時代の貴族、学者、政治家であり、宇多天皇の信任厚く右大臣にまで上り詰めたが、藤原時平の讒言（ざんげん）により大宰府へ左遷され、現地で没した。死後は怨霊となって清涼殿落雷事件など起こしたという。後に天満天神として信仰の対象となり、学問の神として親しまれている。道真が邸内の梅の木に向かって「こち吹かば匂い起こせよ梅の花　あるじなしとて春な忘れそ」と詠んだので、大宰府にその梅が飛んだという「飛梅伝説」もよく知られている。

天神図は平安貴族らしい束帯姿のもの、憤怒の形相で表される綱敷天神、渡唐天神図などがある。渡唐天神図は、没後300年になる道真が、中国宋代の禅僧である無準師範に参禅し授衣印可を得たという伝説に基づく図様。手に一枝の梅を持ち、無準から授かった衣をポシェットのように肩から下げた姿で描かれる。禅僧のほか雪舟系、狩野派の絵師らに多く描かれた。

No. 31　藤井松山《大黒天》(部分) 1959年

## 3. 日本の歴史画

歴史画とは、歴史上の事件に登場する衆知の英雄を、多くは理想化した姿で描いています。中世から近世の日本の伝統的絵画においては、武士の活躍ぶりを描いたものが「武者絵」と呼ばれ流行しましたが、明治期から戦前にかけては、国家神道の考えに基づき神話や勤王思想を図様化したものが尊重されました。本章では平安時代の菅原道真、西行、安土桃山時代の豊臣秀吉、千利休、江戸初期の宮本武蔵、江戸後期の平賀源内らが登場します。近代の画家たちが、歴史上のヒーローたちを憧れや親しみをこめて描いた作品群を紹介します。

### 西行銀猫図（さいぎょうぎんねこ）

史書『吾妻鏡』によると、源頼朝に歌道と弓馬について尋ねられた西行が、「弓馬に関しては兵法書を燃やし忘れてしまった。歌道については奥深いことは知らない」と話をはぐらかそう

No. 34　福田恵一《菅原道真公図》1940年代

としたが、弓馬については夜を徹して語った。翌日奥州に向かう前に、頼朝はお礼にと銀製の猫を贈り、西行は受け取ったものの、門の外で遊んでいた子どもに惜しげもなく与えてしまったという故事。本章では、村瀬太乙《西行銀猫図幅》(No.29)とともに、森戸果香《西行物語絵巻　模本》(No.41)を展示する。「西行物語絵巻」は武士を辞して出家し、放浪の歌人となった西行の生涯の事績や逸話を描いたもの。

### 太閤秀吉

秀吉は低い身分でありながら、人を操る天才的な才覚を活かし、天下人へ上り詰めたことで、戦国武将の中でも高い人気を誇る。武将としての秀吉像のほか、我が子秀頼を抱く姿、北野大茶湯を舞台に賑わいの中で茶会を楽しむ姿などさまざまなシチュエーションで描かれている。本章では福田恵一《太閤秀吉像》(No.43)と、《豊太閤淀殿茶々姫》(No.44)を展示する。

No. 48　福田恵一《宮本武蔵》1940年代

### 千利休

わび茶を完成させ、茶聖とも呼ばれる利休は、秀吉の側近となり多くの大名に影響力を持った。しかし秀吉との間に不和が生じ、切腹を命じられる。利休のわび茶は、「表千家」「裏千家」「武者小路千家」の3つを合わせた「三千家」へと受け継がれ、現在でも「茶道」として親しまれている。本章では、福田恵一による2曲屏風1双《千利休》(No.45)と《千利休》(No.46)を展示する。名物を尊ばず、樂茶碗や竹製の花入、にじり口のある茶室など、禁欲的とも言える独自の美意識に基づいたわび茶を貫いた利休の、真摯な横顔が印象的である。

No. 51　福田恵一《桃太郎》1940年代

### 宮本武蔵

二天一流の創始者で、『五輪書』を記したことで知られる武蔵は、晩年、熊本藩細川家に招かれ仕えた。余技として身近な鳥や小動物、道釈人物画を水墨で描いている。剣を筆に持ち替え、鋭い観察眼と省筆で一瞬の姿を捉えた水墨画には、武蔵の精神性が表れていると評価が高い。本章の福田恵一《宮本武蔵》(No.48)は、おそらく自画像として有名な《宮本武蔵像》(島田美術館蔵)の衣装・髪型を参考に、独自の横向きの座像というスタイルで描いたものだろう。一方歌川国芳「木曾街道六十九次」全71図のうち《武佐　宮本無三四》(No.47)は、籠渡しの籠に乗って野衾(のぶすま)を剣で退治しようとする緊迫した場面を描いている[3]。剣豪武蔵は、巌流島の決闘などをテーマに浄瑠璃や歌舞伎で上演され、その後役者絵や黄表紙といった浮世絵や版本などでも人気を博した。近代では吉川英治の小説がベストセラーとなっている[4]。

No. 53　藤井松林《福山風俗左義長図》1890頃

## 4. 日本の物語絵

### 桃太郎

三太郎(金太郎・桃太郎・浦島太郎)の一つとして広く親しまれる桃太郎であるが、現存する絵画作品で最も早い時期のものは、享保期(江戸中期)の赤本である。大人向けの黄表紙では、遊女と遊んだり鬼を接待したりといった桃太郎話も見られる。この時期は、桃を食べた爺婆が若返って、娘となった婆が桃太郎を生むという回春型が主流だが、近代になると「桃から生まれた桃太郎」という果生型がほとんどを占める。明治大正期には、悪い鬼を退治する勧善懲悪のヒーローとして教科書にも登場するが、戦前には軍国主義のプロパガンダに利用されたりもした[5]。本章の多田香疇・福田恵一が描く《桃太郎》(No.50)(No.51)はりりしい武将姿の座像で、お伴の犬・猿・雉を連れておらず、衣装の桃花や桃果の文様で辛うじて桃太郎とわかる。

### 藤袋草子(ふじぶくろのそうし)

室町時代の絵巻《藤袋草子》(サントリー美術館蔵)を森戸果香が1920年頃に模写したものが《藤袋草子　模本》(No.40)である。昔近江国に住む老夫婦が幼子を拾い、美しい娘に育てたが、翁の不用意な約束で、畑仕事を手伝った猿に娘をさらわれてしまう。老夫婦は観音のご利益で、藤袋に入れられて木に吊るされた娘を見つけ、通りがかった狩人の助力で救い出す。やがて娘は狩人と結ばれ幸せに暮らした、というお伽草子を絵画化したもの。猿の振る舞いは人間さながらで、猿と人間との濃密な交流の歴史を物語る。土佐派に通じる柔らかい筆致で描かれている原本を、森戸はしっかりと把握しながら丁寧に写している[6]。

No. 37　森戸果香《伴大納言絵詞　模本》(部分)1920頃

No. 36　森戸果香《随身庭騎絵巻　模本》(部分)1920頃

No. 40　森戸果香《藤袋草子　模本》(部分)1920頃

## 5. 福山の風俗画

藤井松林は福山生まれで、安政3年（1855）32歳の時に、京都の中島来章門にて円山派を学んだものの、同年には帰郷、長期の出張等はあったとしても、人生のほとんどを福山で過ごしています。しかし45歳の時に明治維新を迎え、それまでの福山藩御用絵師として禄を得る生活から、大きな変化を強いられることになります。世の中は欧化政策に殖産興業・富国強兵と大きく舵を切り、美術界でも美術工芸学校を創立することで、それまでの師弟制度に拠らず学校教育に美術を組み込みます。また、寺社等での曝涼を兼ねた観画会も、美術館等での展覧会で技術を競い合うこととなりました。松林も第1回内国勧業博覧会に出品したり、日本美術協会に所属したりと、同時代の日本画家と肩を並べて活動しています[7]。

本章では、松林が描いた福山の風俗画を紹介します。《福山風俗盆踊図》(No.54)、《福山風俗左義長図》(No.53)、《待月舫観花雅集図》(No.52) の3点はどれも明治23（1890）年頃、67歳前後という晩年の作と考えられます。《福山風俗盆踊図》、《福山風俗左義長図》においては、江戸時代から続く地元の盆踊りや左義長のお祭り風景が描かれています。また《待月舫観花雅集図》では、髷を結い着物を着た男性たちが、月を愛でながら書画や小宴会を楽しんでいます。江戸時代後期の行事のにぎわいや、文人たちの風雅な集いに、前時代への郷愁が感じられます。後に依頼を受けて仕事として描いたテーマでもあったかもしれませんが、福山藩御用絵師時代に培った画技により、生き生きとした当時の面影が画面から漂ってくるようです。

## 6. 日本近現代洋画における人物表現

ここでは近現代の日本人画家による油彩画を中心に、豊かな個性を味わえる作品を選んで展示しました。満谷国四郎、寺松国太郎、岸田劉生、南薫造、白瀧幾之助ら当館の所蔵品展ではおなじみの作品です。モデルとなっているのは、家族をはじめ身近な人物が多く、親近感を持って内面まで描こうとしているものもあります。一方で永遠のテーマである「人物」を普遍的なモチーフとして描いたものもあります。制作の背景を知ることで関心を高めていただきたい例として、ここでは斎藤真一作品について紹介します。

### 斎藤真一（1922-1994）

岡山県倉敷市に生まれ、天城中学、岡山師範学校を経て東京美術学校（現東京藝術大学）を卒業。岡山県味野中学校、岡山県立天城高等学校、静岡県立伊東高等学校で教鞭をとり、この間、日展や光風会展などに数多く入選。昭和34年（1959）36歳の時にフランスに留学。ジプシーに心惹かれて、スペイン、イタリア、ドイツ、オランダ、ベルギーなどをモーターバイクでさすらいの旅をし、藤田嗣治と親交を結んだ。帰国後、藤田の勧めもあり、東北を旅行し、訪ねた津軽で瞽女（ごぜ）について初めて知った。「瞽女」とは、新潟県を中心に北陸地方を転々と移動しながら、三味線等を弾きつつ唄った盲目の女旅芸人である。明治から昭和初期までは多数の瞽女が活動していたが、戦後急速に減少した。斎藤は独自に取材をおこない、それを元に、瞽女を主題にした数々の作品を発表し、一躍注目されるようになり、昭和46年（1971）第14回安井賞佳作賞を受賞した。作品には、「越後瞽女日記」「さすらい」「明治吉原細見記」「街角」等のシリーズがある。エッセイ、画文集などの著作も多く、昭和48年（1973）には『瞽女＝盲目の旅芸人』で第21回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞している。

斎藤真一の重要なテーマである「瞽女」との出会いは、彼の芸術世界を確立させた。産業化が進み世の中が変化を遂げて行く中で、瞽女たちの生きる姿は人間の真実を映し出すものであり日本人の原点であった。斎藤は越後の瞽女宿をくまなく巡り、彼女らの人生を丹念に取材して、悲しみや別れ、死といったテーマに取り組んだ。キリスト教の祭壇画のような宗教画風の構図を試みたりと、生死感や生きざまを真正面から描き出そうとしている[8]。本章の《おてい瞽女とおきな瞽女－越後瞽女日記より》(No.67) も、まさに瞽女の人生そのものを描き出している。

以上、絵画における人物表現について述べてきましたが、会場内には彫刻作品も展示しています。舟越保武《聖クララ》(No.14)、《聖ベロニカ》(No.15) は、戦後日本を代表する彫刻家である舟越が、カトリックの聖人をモデルにした作品。平櫛田中の木彫作品では、寿老人をモデルとした《寿星》(No.76)、大きなお腹と袋がトレードマークの《布袋》(No.77) が展示されます。絵画のみならず立体表現によって、さらに人物表現の多様性をみることができます。また安斎重男の《ロダン；地獄の門（部分）連作》(No.16) は、同時代の作家たちの作品やポートレート、パフォーマンス等を撮影し続けた安斎が、「地獄の門」の部分に目を凝らし、撮り続けた連作30面から選んで展示。安斎の眼を通して見たロダン彫刻も楽しむことができます。平面作品と同様に、モデルとなった人物、そして作者それぞれの思いに心を寄せながら、人が人を表現し続けてきたその魅力に近づいていただけると思います。

芸術における永遠のテーマ「人物」は、依頼主からの注文制作も含まれるものの、「描かずにいられない」という表現欲求から成立したものも多いことでしょう。作品に込められた思いを汲み取りながら、人物表現の多様さ、奥深さを感じ取っていただければ幸いです。

（学芸員　中村麻里子）

No. 73　中山巍《少女》1951年

No. 67　斎藤真一《おてい瞽女とおきな瞽女－越後瞽女日記より》20世紀

No. 76　平櫛田中《寿星》1962年

**註**

（1）『ふくやま美術館所蔵品目録Ⅲ』2014年、11頁
（2）『ふくやま書道美術館所蔵品図録Ⅶ　日本の書画2　幕末から現代　栗原コレクション』2007年、158頁
（3）平木浮世絵文庫Ⅰ『歌川国芳　木曾街道六十九次』、財団法人 平木浮世絵財団、2010年
（4）展覧会図録『武蔵　武人画家と剣豪の世界』江戸東京博物館・岡山県立美術館、2003年
（5）展覧会図録『描かれた桃太郎』 岡山県立美術館、2007年
（6）展覧会図録『お伽草子　この国は物語にあふれている』作品番号61《藤袋草子絵巻》作品解説　サントリー美術館、2012年
（7）展覧会図録『藤井松林』福山市立福山城博物館、1991年
（8）妹尾克己「斎藤真一　故里と出会う旅」展覧会小冊子『斎藤真一　さすらい展－なつかしき故里をもとめて－』岡山県立美術館、2003年

※基本的な画題解説および作家解説は、『新潮　世界美術辞典』(新潮社、1985年)を参考にしました。

ふくやま美術館所蔵品展示目録　No.165
発行日／2023年12月23日　編集・発行／ふくやま美術館(広島県福山市西町2-4-3)　印刷／株式会社中野コロタイプ